

平成 28・29 年期 神奈川県青少年問題協議会 第 8 回企画調整部会 議事録

日時 平成 29 年 11 月 1 日 (水) 10 : 00~12 : 00

会場 横浜情報文化センター 7 階 大会議室

○青少年課長

皆様、お忙しい中、御出席いただきありがとうございます。

本日の出欠状況ですが、山田委員が御欠席で、部会委員 9 名中、8 名の御出席で定足数は達しているという状況でございます。また、傍聴の申し出等はございませんでした。

それでは早速ですが、萩原部会長、進行をよろしく申し上げます。

○萩原部会長

ただ今から、神奈川県青少年問題協議会 第 8 回企画調整部会を開会します。本日は議題が 2 つございまして、主には議題 1 のほうに時間をとって御議論いただきます。

議題 1 「最終報告書の検討」についてです。事務局から資料に基づき説明をお願いします。

(資料 1 平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会最終報告 (素案) 説明)

○萩原部会長

ありがとうございました。報告素案を御説明いただきましたが、報告素案はこれまで皆様に御議論いただいた議事録から抽出し再構成したもので、皆様の御意見が反映されながらつくられています。私から少し補足をしたいと思います。

第 1 章はテーマ設定についてです。第 2 章は「若者による地域づくりのカタチ」というテーマを議論するにあたって最初に論点を提示しました。その論点を手がかりにしながら第 3 章では皆さんに御意見、御発言いただいた内容が盛り込まれているかと思えます。特に第 3 章では多世代で対話する場が必要ではないかということで、話が進み、第 4 章では単に若者世代だけを取り出して意識調査をするのではなく、多世代との対話、交流の中でお互いがどのように語り合うかということ意識しながら、ちょっとユニークな調査の仕方だと思いますが、場のつくり方そのものも今後の実践、政策提言にもフィードバックされると思いますが、第 4 章ではこれまでの議論を実際にやってみるというものでした。第 5 章は皆様からアイデアを是非出していだきたい、今後についてということです。

これから、60 分強の時間をとりながら内容についてひとつひとつ御議論、御意見いただきたいのですが、基本的に今後のスケジュールを考えますと 12 月頃に最終報告案の検

討をもう一回議論する場があり、1月にほぼ最終報告の形になるので、今日と次回、基本的には各章の中で、報告書としてまとめていく共通認識を持っていただきながら足りないものであるとか、修正するといった御意見をいただければと思います。順を追って進めていきたいと思います。

まず、第1章です。これは、前回議論されたものです。第1章は、前回の議論をうけて修正をかけたもので、概ね皆さんの御意見でまとめられていると思いますが、いかがでしょうか。特に気になる点などありますでしょうか。テーマの趣旨と報告書の対象ということですが、10代、20代をメインターゲットにしながら30代にも触れて若者ということで記述されています。

○宮島委員

前回、欠席しましたので、既に議論されていることかもしれませんが、地域そもそもについてですが、若者は地域から外れたいという気持ちもあると思います。地域の中に自分の関心のあるものがないから東京に行くとか、地域の雰囲気が嫌だから遠くに行くなど、ままあると思います。そこで斜めの関係を持つことがよくあると思います。今回の地域づくりという、最初から地域とあるのは、活性化したい地域の側からも若者が必要だという大人側からの要請があるということでしょうか。

○萩原部会長

これは、これまでの議論で、そもそも地域を前提とするか、無前提とするかという話にもなりますし、前期の指針づくりのなかでもでてきたものですが、若者・子どもが育っていくような伝統的な地域組織というものが非常に厳しい状況に置かれている。これは今の報告書にもでてくるわけですが。前回は、1ページの(1)の修正線がふられています。地域とは子ども・若者の育ちに必要家庭や学校以外の場を指すと事務局案としてありましたが、そもそもこのように定義できないのではないかと、今御指摘いただいたのは、おそらく既に地域があって、そこから子どもたちが飛び出ていくイメージですが、子ども・若者が一人前に育っていく旧来の育ちのサイクルが地域だけでできるというのは厳しい。ここでは、若者によると書いてありますが、若者とともどのように地域イメージを語れるか、考えていけるかという趣旨かと思います。ですからあえて、ここでは地域の定義はしないということで、始まっていたかと思います。一応前回の議論ではそういうことでした。

○笹井会長

宮島委員がおっしゃることはよくわかります。地域を固定化されたものと捉えて考える発想と、もっとダイナミックに考えると違うのではないかと御指摘だと思うのですが。

○宮島委員

私は横浜で育ったのですが、地元が息苦しいから東京のコミュニティに高校の頃結構行って、全然自分が知らない人の中の方がいいということがありました。むしろ、ここでいろんなことを知ったという経験があります。今回は地域をあえて取り出して、テーマコミュニティではないよねという話なのですが、もっと広くテーマコミュニティと地域コミュニティと乱暴に分けると、今回はテーマではなくて、あえて地域ですよということ、その理由としては、若者に関わってもらいたいという地域の側の要請もあるのでしょうかということです。

○笹井会長

人間が生きていくときに、仕事をする、要は生活をするわけです。生活の場としてという意味での地域だと私は理解しています。しかも地域は、固定化された地域ではなく、「地域づくり」という固有名詞、なんというか地域をダイナミックにつくっていくというそこへの若者の参加であり、若者に活動していただきたいということだと思います。ある意味、古い地域があつてそこに参加するというイメージというよりは、動いているところがあつて、地域づくりというある種の営みというか、活動に参加するためにという問題意識で考えるということではないかと思います。

○宮島委員

身体的に普段、日常生活を送る場という捉え方ですか。

○笹井会長

そうです。そこがハッピーにならないとやはりワクワクしない。不幸じゃないかと思うのです。

○萩原部会長

確認ですが、テーマコミュニティとはどのような意味なのかを教えてください。

○宮島委員

例えば、音楽などロックをやっています、バンド活動をしていますというときに、自分の住んでいる身体的、日常的にいる町よりも電車に一時間半乗るのだけれども、そのライブハウスのコミュニティがあるから好きとか、そこがあるからこそ、毎日つまらない日常を送れるといったことは、まますると思います。例えば、コミケの同人誌の世界とかもそうだと思いますし、そういうところで逆にむしろ若い人たちが生きていることが多い。データがあるかわからないですが、普段の生活が空っぽでも、そういうところがあるから生きていける時期があるのかなと思ったものですから。

○萩原部会長

生活圏の地域とは違う、身体的にはそこを飛び越えたところでつくられているコミュニティのことをテーマコミュニティと表現されている。

○宮島委員

そこがあるから支えになっている。そういうところが若者の中で存在が大きいのかなと、私もそういう時期がありましたし、皆さんもあると思うのですが。でも地域が空っぽになっているというか、地域がそういう人がいないと思っている。それをあえて今回はそっちではなくこっちをという、必然性というか、理由というのは、今おっしゃっていたように実は地域が毎日もっと身近な部分でハッピーになるとよりいいという話がここに必要なのかなと思ったものですから。

○笹井会長

テーマ型コミュニティは、ボランティアも完全にそうですが、地縁型よりもテーマ型に世の中がシフトしていることは確かです。テーマというものは、遠方の地域のテーマもあるかもしれませんが、その地域でテーマをつくってもいいわけです。テーマ型コミュニティは別の視点の発想で興味があるのですけれども、今回は、地縁的なある種の広がりベースにしつつ、しかしその中で、もちろんテーマ型の活動も大事にしていく。そういう意味では矮小化というか小さくして考えていくものと思います。

○宮島委員

小さいというか、ハイブリットになってくるかなと思っています。遠くにしかないと思っていた例えば漫画のコミュニティが実は近くにもあって、今、若者はオンラインで世界中とコミュニティを飛び越えて一気に繋がっている。地域が空っぽでも何も困らない。感情的、心的には。逆に地域の側が困っているから若者に参加してほしいという裏事情が読み取れてしまうと良くないのかなと、そういうこともあるよと逆にちゃんと出すのかわからないですけれども。ただ、ITのコミュニティでもシビックテックといわれるように、本当はオンライン上でいろんな世界と繋がっているけれども、あえて地域で顔が見える関係で、エンジニアの人たちが出会って顔を合わせてコードを書くといった活動があります。テーマと地域というものがハイブリットになってくるのかなと思っています。そういうところに、若者は自分の好きなところから地域に刺さってくるのかなという気がするので、そういう視点もあるのかなと思います。

○笹井会長

これは、その通りだと思います。部会長とお話をしている限り、メディアの問題は避けて通れない。おっしゃるように、地域から離れたところにはどうしてもメディアが介在す

るケースが圧倒的に多い。そういうコミュニティも実際にLINEといったものがありますが、その問題を切り離しては考えられないことだといつも話をしているのですが、議論としてはリアルの方を中心に考えていくのではないかと思います。

○宮島委員

これもリアルなんです。だからハイブリットが当たり前の世界かなというのがあります。切り離せない、これがリアルなんだという意識で、そこを上手く使うということになっていくのかなと思っています。

○萩原部長

そのあたりは今後の方向性にも繋がってくるのではないかと思います。どういう前提とするか現状を調査する。前期の指針づくりでは、若者の自立、参加、共生というテーマで議論した際に、息苦しさを感ずる地域さえないという問題意識がありました。身近に本当に顔の見える若者の育ち、自立、社会参加に結びついていくような、かつてのようなおせっかいな大人もいなくなってきた、そういう機会さえなくなっているという現状認識がありました。多くの若者がメディアを駆使しながらも、リアル、面と向かった実際に顔の見える関係性をうまくつくっていくのかもしれませんが、例えばひきこもりがちな若者は、メディアの世界、抽象的な世界から抜け出せないということが一方であります。どこに手がかりを求めていいかわからないという、一方でそういう厳しい現状もあるので、今回はそういう意味では会長がおっしゃるような具体的な顔の見える関係性を具体的に想定してきたかと思っています。そこはあえて言語化してこなかったのが、貴重な御指摘をありがとうございます。

○宮島委員

しつこくて申し訳ないのですが、青少年がそっちの世界にいるのだったら、大人の方がそっちのコミュニティにも参加していかないと接点がないよねということをおは言いたかったのです。リアルな方だけに大人の方が閉じこもっていると、彼らは、私達もそうですが、まず情報をオンラインで知って、リアルに行くという行動を私達自身もそうですが、そこをやらないで知り合うこともできない。相手のコミュニティにどう近づくかという議論が結構大切なことだと思っています。

○萩原部長

その辺は、3章あたりにかかってくる御指摘かと思っています。1章部分はよろしいですか。では2章はいかがでしょうか。2章は4つの論点、「若者による地域づくりのカタチ」を議論していくうえで、ここをあえて考えていく必要があるのではないかとということで4つの論点を提示しました。先ほど御指摘いただいたことは「4 地域の現状について」の

ところに加えられていくともう少し今の時代状況を反映されるものになるかと思います。報告書の構成としてもこの順番であるとか、中身の修正などありますでしょうか。

○田中委員

「2 大人と若者の関係について」に関わることだと思うのですが、宮島委員のお話にありましたけれども、テーマ型コミュニティというのは大事だなと思います。今、高校の学校運営協議会を少しお手伝いさせていただいているのですが、部活を1年生で辞めた子が気力を失ったり、居場所をなくしたり、無気力になってしまい、学校でも気になる子どもとして認識されているという話がでたことがあります。今の中高生は自分の好きな世界がはっきりとあって、居場所を探しているというか、LGBTについてもかなりオープンになってきている。自分が自分らしくいられる場所を感度よく探している感じがします。そういう自分にぴったりくるような情報を探せる子はどんどん自分で場に出ていって、人と繋がっていくことができますが、そういう情報がないのか、出会えていないのかという状況だと学校の先生からみて心配で無気力な状態に見えてしまうということが課題としてあげられていましたので、どうやって一人ひとりの若者にその子がぴったりとくる情報が行き届くかという、機会自体は増えており、いろんな場やイベントといったきっかけ自体は増えていると思うのですが、どう若者と繋いでいくのかということをも身近な大人が情報提供するのか、ネットで得るスキルを上げるのか、そのあたりがとても大事だと思いました。

○萩原部会長

その視点で私が最近知った事例は、横浜総合高校で取り組まれている校内カフェの事例です。この高校は3部制の高校で、夜間も含めていろんな時間帯で大学のように単位をとります。元々いじめや不登校を経験した若者が集まる高校として特徴的で、中退率もそれなりに高い。校長から公益財団法人よこはまユースに依頼をかけて1日中ラウンジでカフェをして、そこに大学生ボランティア、よこはまユースのスタッフも入っていく。そこで自由に無料でお茶を飲める。1人で行ってもいいし、友達とおしゃべりをしてもいいし、ゲームをやってもいい自由な空間をつくっています。そうしたら結構そこで、家に帰りたくない、バイトが忙しすぎるとか、つまり家計を支えなければならず、自分が稼ぎ頭になっているとかいろんな悩みが語られていく。それをキャッチしていきながら、今度は多文化共生のNPOやあるいはカウンセリングに強いNPOとコラボレーションしていく。社会福祉協議会や地域の中小企業の社長さんもやってきてサポートするようになる。そういう展開が生まれているところがあります。それはどうしていいのかわからない若者にとっては、今おっしゃったきっかけ、場をつなぐプラットフォームになる。青少年団体やNPOが入り、きっかけやチャンスをつくるというか、キャッチしてつなげるひとつ参考事例です。神奈川県の中では田奈高校、元々は大阪の西成区の方から始まったそうです。

○墓田委員

私も都立砂川高校で、砂川カフェというものを第3土曜日に実施しています。先ほど宮島委員がおっしゃっていた通り、若者はネットでいろんな情報をキャッチして、動くタイプもいます。特にひきこもっている若者は家族から見たら、誰とも関わっていないと思ったら、実はネットで繋がっていて、ロシア人、イスラエル人、世界に繋がっている。言語もできないけれども、グーグルの和訳ツールを使いコミュニティができていているという事実もありました。でも、一方、高校に行くとネットではないリアルを求めてやってくる高校生がいて、普段は、皆ネットを中心に動いていると私達は思い込んでいたら、延べ毎回70人来る子の中には、「スマホを持っているだけいいじゃん」と言う子も中にはいます。ネットで配信することは必要ですが、ここに来ると安心した大人とお茶を飲みながら、自分の困っていること、大学に行きたいけれども、親に反対されお金をどうやってつくるのかということや学校内のキャリアカウンセリングで話をする。普段言えないことをつぶやいてくる。

ポイントは色々な大人達がやって来て緩やかなつながりがあること、大学生のお兄さん、お姉さんから、自分の近い将来のモデルケースと出会うということが必要だと実感しました。前回、地域は、学校以外のところでしたが、私は学校も地域のひとつとして良いかと思えます。地域の人と出会う場として良いのかなと思えます。所属がある若者に関しては、学校は地域の中のひとつとなっていくのですが、若者全体となるとネットも、リアルの一つとして考えられるので、それをどうやって神奈川県の中のこのテーマの中に両方とも入れていけるかとすごく悩ましいと感じています。でも、砂川高校で実際にリアルな若者達と出会うことにより、行動変容していきます。私達自身もみんなと話をしているうちに悩みが出て来て「レポートが書けない」ということだった。カフェではできないので後日私達の場所に来てもらい、学び直しということでレポートのお手伝いを継続的に場を提供し実施したところ、諦めずに卒業まで辿りつくことが実際にあります。

○宮島委員

今のお話で、田奈高校のカフェをつくる時に少し関わっていたのですが、要は、大人の側が何をするのかという視点をもう少し入れることが必要ではないかと思えます。若者がこうであるから、こうでなければならないというよりも、具体的にハイブリットな大人が、ツールを使い、多様な場があるよと大人の側が用意する必要があると思えます。ネットで入ってくる人もいれば、ネットからリアルに一步踏み出した若者もいれば、あまりネットをやらずに快活にどこでも行けるコミュニケーション能力が高い若者もいる。大人もそうだが、若者も多様なので、大人の側が同じものであってもネットから入ってくる人、リアルで来られる場を用意するといった、色々策を使ってとにかくこんな所があるよ、こんな事があるよということを発信することが足りないのかなと思っています。「4 地域の状況について」も、若者世代が入っていきにくいということがありますが、では何を

大人は変わるのかというところで、変わらないのであれば、代わりに何をを用意するのかということが提言になるのかなと思っています。多層的なネットワークを組むということが具体的にどういうことなのかということでしたり、発信まで多様性を持って大人側がしていく必要があるところまで踏み込んだほうが、今お話になった部分で思いました。

○墓田委員

確かに、周知については、昔はチラシを見て人が来る、回覧板を見て来るというのがありました。今はそれもやりつつ、Twitter、Facebook、動画を流すといったことをしています。若者は答えが見えないもの、結果が分からないことにとっても慎重なので、チラシだけだと何も見えないと来る子達によく言われるので、ちょっとしたイベントをネットで流すと、こういう人たちが来るのだったら自分も行っても違和感ないなと、ネットの中のリアルで見て、現実のリアルにやってくるという状況が増えてきています。私達NPO団体が活動の中で取り組んでいることです。そういうことが周知の中で必要なのかなと思いました。宮島委員と同じです。

○村田委員

現代社会の中で、Facebook、Instagram が盛んになっていると思う現状はありつつも、情報リテラシーがまだまだ全然できていない若者が正直多い。リテラシーというのは、情報を検索する力や正しく使っていく力というのが、まだまだできていないなということを感じます。さきほど、大人とどう繋がるか、大人が若者の土俵にどうやって入っていくかという話があったときに、確かに大人は、実際の地域に入ってきてくれというけれども、大人はインスタのところには入って来ないなと思いつつ、簡単に言えば僕が皆さんの生活を知りたいからインスタ映えする写真を1日1枚インスタにのっけてくださいと言ったら、多分難しいかなと思います。多分、大人と若者の感覚の違いはそこだと思っていて、若者は今自分のきらきらした写真や、日常生活のここは共有してもいいなと思う一部分を写真に切りとって世界に発信をしている現状があって、それを大人が見て最近の若者はフワフワしているとか、チャラチャラしているとか、そういうことを言われるのですけれど、僕らも大人の実際に分からない状態があり、大人も若者も今怖い状態なのかなと思います。さきほど墓田委員がおっしゃっていた Instagram、Facebook、LINE でイベントがあることは、すぐに周知できると思います。若者の力もそういう自分の興味のある分野に関しては、取る力というのはすごくついていると思います。今、学生団体や個人でもイベントを開くことは、レンタルスペースを自分でレンタルして、イベントを開くということは誰でもできることによって、若者言葉で言うと「盛る」、情報を盛って、誰でもいいよとか、無料だよとか怪しいという文句で、結局そこについても自分が期待していたものが得られなかったということがすごく増えているのかなと感じています。

また、一部の生徒の評判のためにその学校全ての生徒が地元のお店で出入り禁止にな

っていることがあります。その学校の制服を着ていることによって偏見を受ける。その子達はちゃんと部活をやっているのに、その制服を着ているだけで大人たちは、あの学校なのねと見るということがすごくあると思います。僕は実際に友達から話を聞いていて、そんなことないと感じるのですが、偏見じゃないですけど、そういうことが根強いのかなと思います。それをどうやって若者と大人、もっと上の世代が偏見をなくしていけるかということがすごく大きな問題なのかなと思っています。

○萩原部会長

第3章にも関係するような御意見をいくつかいただいています。第2章は現状分析と今後の課題というところに力点が置かれています。第3章は、若者による地域づくりを進めるうえではどう具体的に考えていったらいいのかという視点です。

事務局から先ほどでていましたが、大人が対話的であるべきだとか、今後は大人が若者の声を聴かなければならないといったことなど、大人に向けての提言は書いてあるのですが、では若者自身はどうあったらいいのかということが、あまりでていないという指摘を受けていますので、そのあたりについていかがでしょうか。ここまでの議論では、社会や大人の方が現状を受けて変わらなければならないということで議論されている。

○嶋村委員

なんとなく、もやもやとするのは、若者の力がないから大人がこれをさせなければならないという雰囲気があるという気がしています。そういうロジックモデルというか、それに基づいてというのではない若者像が先ほどからのお話の中にも入っていた方がいいかなと思います。

○萩原部会長

論調としては若者が弱い存在、ちょっと力が足りないかなという位置付けに暗黙のうちになっているということでしょうか。

○嶋村委員

教えてあげなければいけないし、参加させなければならないというところがあるかなと思います。

○萩原部会長

そのあたりを逆に捉え返していくような視点やワードとか考え方、フレーズが出てくれば、具体的にこの部分の表現がそういうことを醸し出していないかという視点、御指摘がありましたらお願いします。

○墓田委員

実際に現場で若者を支援していて、支援者同士で一番気をつけないといけないところは、第3章1(3)がポイントで、「親や兄弟姉妹でもない「斜めの関係」でいられるような第三者」がというところで、支援していく中で一番、私達支援者同士が気をつけなければいけないと思っているし、みんなが間違えるのは若者や、不登校などの問題を抱えている子どもたちのことを未完成だという見方をしてしまうことです。でも、自分達も未完成なところがあるから、そこはフラットな関係で、常に上からではないということを特にそういった弱い、問題を抱えている子どもたちはその関係性をすごく気にするかなと思っています。その辺がフラットな関係で上からではないということがもう少し伝わればいいと思います。

○宮島委員

私も、シェアオフィスなどを運営し、イベントをやっている立場で、NPOというのは会社と違って皆さん一緒に、多いのですけれども、来る人は拒めず、いろんな人がやってきて、ここにある若者の特徴は大人の特徴でもあって、あまり境目がない。歳をとっていても、自分の想像だけで相手の言葉を解釈することによって非常に傷ついてしまうということは、いろいろと話を聞いていると、50代、60代の方でも当たり前いらっしやる。同じ弱さを持つ者同士みたいな感じなのかなと、今フラットというのはそういう面でおっしゃっていたのかなと私は解釈しました。大人の側も地域に居場所、精神的な場所がないし、繋がりもないのですよね。非常に同質性の高いところで、年齢の高い人同士とか、お母さん同士とか、お母さん同士でも例えば育児のことだけは話すけど、介護のことは話せないとか、同質化されたところにいることが多くて、あまり丸ごとの自分を配慮してしまい、出せないケースが多いので、一緒に悩める者がいるよねという形。大人が歳をとっているから上手くいっているのではなく、湯河原の検証の時にも闇の部分とか弱い部分を大人の側から出すということが大切なかなと思っています。上手く言えないのですが、そこから対話の糸口があったりするのかなと思います。

○坂倉副部長

ちょっと違う視点だと思いますが、地域の状況の捉え方や若者が力を発揮できる環境づくりという視点で、ちょっと大きな話になりますが、町内会、大学や新卒一括採用みたいなものなど、現状に合わなくなっているシステムがあり、そこに合わせていかなきゃいけないときに既に最適化している大人は何も感じないけれども、それになぜ合わせなくてはいけないのかという、若者がくじけるという現象があって、じゃあ若者がそこに合わせていくためのサポートをしている場合ではなくて、システムを変えたほうがいいのではないかと思います。10年くらい大混乱になるとは思いますが10年間混乱したけど、結果最適化していけば10年後には生きやすい、育ちやすい社会になるのではないかと思います。

ことを考えると、「若者を」と対象化して見るとか、サポートする大人の振る舞いを見直すという前提となるシステムというかOS自体を変えていかなきゃいけないという視点もあってもいいかなと思います。

○萩原部会長

それぞれの時代状況で、生まれた時代のシステムに体丸ごと私達は馴染んでしまっていて、馴染んでしまうと思考も馴染むわけですから、それをただ一方的に大人が価値観を変えればいいという話にしてしまうと、小さい頃から馴染んで、体丸ごと馴染みきっている、無意識に近い立ち居振る舞いをそう意識的に変えられるかという点と、実際の実践をしようとする時にそこにぶつかっていくのではないかな。場のあり方、環境のあり方、そのものを変えていく、システムを変えていくという視点はとても大事ですね。

○嶋村委員

そうしていくと仲介役になれるような人がいないところがあるのかなと思います。町会や子ども会活動で頑張っている人たちはいるけれど、あまりにも実状に合わないということがあるときに、さきほどのカフェもひとつになるとは思います。現状とギャップをうまくすり合わせる誰かとか、触媒みたいな人がいると繋がったりするのかもしれないけれど、それがないままだと離れたままで、せっかく頑張っているのに、大人に変われといわれる人が世の中にごまんという状態がずっと続いてしまう。そういう意味では子どもの現状に限らず、大人の方の現状というか、変わらない現状とその変わるきっかけがないということがあると思います。

○笹井会長

嶋村委員の発言に感銘しているのですが、スクラップアンドビルドではなく、町内会の持つガバナンス機能といいたいでしょうか、あるいは地域づくり機能を相対化することが大事だということです。以前に御紹介したグランドワーク三島がなぜ上手いっているかという点、それぞれテーマごとのコミュニティがあるのですが、蛍を守る会や何かをつくる会などいろいろあり、それぞれ地域づくりをある種のガバナンスをしている機能をもつテーマ型のコミュニティがあり、それぞれが活動していて、全体として見てまさにコーディネーターみたいな人がいて、上手にネットワーク化してコーディネートして、全体を知って三島全体の地域づくりをしている。つまり、一元的に地域づくりをやる、地域のガバナンスの主体というのがあって、それを全面的に、それ自体を変えることは難しい話だけでも、持っている機能や力を相対化していく。ここの部分はここの活動団体に任せますとか、この部分は全部若い人たちに任せますという、それ全体として嶋村委員がおっしゃっているようなコーディネーションをネットワークングして上手にまとめていくことが非常に現実的だと思うし、そういう方向にいかなければならないと思います。

○萩原部会長

それが多層的になっていくということになるのかと思います。地域を一元的に捉えるのではなく、多層的に緩やかに繋がっていく全体として分厚くなっていく、ある方は“溜めのある社会”という言い方をされています。他にいかがでしょうか。

○坂倉副部会長

第3章2(1)の若者がクリエイトするということ。1が繋がるで、3が伴走するですが、もう少し若者自身というか、若かろうが若くなかろうが別として、一緒に何かをつくっていく、制度やルールや仕組みをつくっていくことについてもっと開かれているということが、もっと大事だろうなというのがありました。自分達で議論して決めて、実際に社会が良くなるという成功体験みたいなものが、私もそうかもしれないですけども、多分少ない。いわゆる民主主義みたいなことを幼稚園、小学校とかであまり体験してこない人が多いと思うのですが、やっぱりみんなで議論をして意見を言い合って合意できる場所を探して、結果やってみたらこれまでよりも良かったねと思える体験がなければ、それは選挙とか行かないよねというお話だと思います。国のことになる前に、まず身の回りのことでできるはずで、一緒に考えてより良い環境をつくるということをいろんな世代の人が一緒にできる環境がとても大事で、今すぐには思いつかないですが、多分そういうことを取り組んでいる事例というのはいっぱいあると思います。

○田中委員

今の話に関連して、大人も子どももつくり手側だという感覚が投影されるといいなと思います。誰かがやってくれるという、例えばPTAや町内会、行政も誰かがやってくれるはずだと、自分はできればやりたくないという捉え方をしていると、子どもにもその雰囲気は伝わっていくと思います。PTAや町内会でもクリエイティブにやっているところはあるわけで、でも多様な人が参画するとかつてのシステムのようにはきっちりいかないけれども、多少のゆるさを共有して過度な期待を持たずにみんながつくり手側になる意識が子どもも含めて共有されていくといいなと、イノベーターというか、小さなイノベーター、すごいリーダーシップを取る人というよりは、一人ひとりが小さな改善の担い手であるみたいな社会になっていくといいなとお話を伺いながら思いました。

○墓田委員

イノベーターというところでは、高校生と関わっていると、大人側も経験不足のところがあります。遊びというところで、現在、ボードゲームが私達の団体の中でブームになっています。ボードゲームは、一番下は10歳くらいから上は60歳過ぎまで、一緒になってやっています。ネットでもできるし、リアルに戦いたかったらその場所に行くという、そういうことで人が少しずつ集まってきています。それは高校生のつぶやきの中で、ただみ

んなでボードゲームやりたいということがきっかけでした。色々対話して、議論してということではなくて、ぼそっとつぶやいたことでみんな興味ある、「やってみたい」、「初めてだから」ということで、私達もそれってどういうことって入っていった。自然なあまり作り過ぎないつぶやきからできるといいのかなと思いました。それを探るのがどうやって探するのかということがありますが、言えるような場というのが必要かなと思いました。

○宮島委員

やりたいと思ったことが叶うということですよ。大きいものも、小さいものも。やりたいと思ったものが、何がやりたいのかすらわからないとか、小さいことでも。ボードゲームがやりたいということは、もしかしたら家では言えなかったことだけど、ここでは言えるみたいな。何か、そういう時空というか、環境としては必要だし、あとはくだらないことでも、どんどん言えるとそのうち、いいね、いいねというものになっていく。肯定してくれる相手がいてというところが必要なのかなと思いますけど。とにかくやりたいということがすぐに素直に言えるということが、他者や評判を気にしないで言えるということがまずは主体になる。小さなことでも。その先にクリエイティブがあるというか、そう思いました。

○萩原部長

そのような御指摘を伺うと、章の見出し、節などのタイトル付けに工夫が必要かもしれないですね。これは前提の前提にもかかってしまっていますが、「若者による地域づくりを進める」に、「若者による」としていいのかということも、かかってくるのですけれども。やはり、「ともに」がないと、共通してそうかなと思います。3章の1(2)のところ、「大人が若者の話を聴く」というところは、「大人と若者がともに語り、聴く」というようなそういうところでしょうか。時折、主語が「大人が」となっているところがあって、それで全体的に論調として大人がしてあげるといった雰囲気をつくり出しているのかもしれませんが。そこは一貫して、大人と若者がともにということを一貫して貫いていくとこの協議会で言っていた視点が出ていく感じになるかもしれません。わりと工夫はされているとは思いますが、若者と大人がともに学ぶ、場をつくるというように、両方が混ざっている。8ページ2の「若者の経験を大切に」というタイトルづけは、暗黙のうちに社会や大人が主語になる。ここを先ほど御指摘いただいたような、一緒に考えてより良い環境をつくっていくようなタイトル付けにする。そうすると9ページの若者に伴走するというのもどちらかという大人論になってくるといった感じになりますが、御意見ありますでしょうか。

○宮島委員

審議テーマを今から変えるというのはあれかもしれないですけども、やっぱり坂倉

先生たちがやられている多世代というのがしっくりくる。多世代による地域づくりのカタチの中で、若者のチカラも、という感じがあると思いますし、相互に伴走しあうというか、相互の経験を大切にしあうというか、さっきおっしゃった未完成な存在、それはそのまま丸ごとその人なのだとということであり、リスペクトが年代の違いは関係なくあると思いますし、その感じがもう少しでると、しっくりくるかなと思いました。

○萩原部会長

そのあたりの議論、人間のそもそも持っている共通した弱さみたいなところの議論は以前の部会だったと思いますが、わりと集中的に話題になったことがありますので、そのあたりから拾い出してもらえるとよろしいかなと思います。

○笹井会長

前回は議論になっていますけれども、子どもは学ぶべき存在、教えられるべき存在であって、大人がそれを教えるという先入観は、日本人の考え方、つまり子ども時代に集中的に学んで、卒業して完成してそれをもとにずっと仕事とか一生を送りますという。学校教育をきちんとマスターすれば、完成されたものができる。それを終わった人は完成されているから教えるべき存在だということがあると思います。自分の専門が生涯教育だから面白いのですが、生涯にわたって学ぶ、学び続けることが大事だということは、実はそれを克服しようとしている。70代、80代になっても謙虚に学び続けなければならないということは、未完成なのだよといっているわけです。だから、時間的な観点、時間軸の観点、学び続けることがとても大事だという、未完のままだけれども、それをベターなものに一步でも二歩でもいいものにしていく、続けることが大事だという考え方です。そういうのが言語化されるといいなと思いました。

○萩原部会長

お互いのパートナーシップ、若者と大人のパートナーシップをより分厚くするために、今の生涯学習の視点を加えると、ここでの議論が広がりを見せていくと思います。

○笹井会長

タイトルでなくてもいいのですが、つくり続ける、学び続けるという、継続とか持続という意味、ニュアンスがでるような言葉が入るといいかなと思います。大人であっても、年寄りであっても学び続けるということを暗に言っているという意味になるといいと思います。

○萩原部会長

私のほうからあえて申しあげたいことがあります。これは皆さんの御議論を前提とし

たうえで、子どもが0歳から始まり、若者になり大人になるという人間が学び、育つというダイナミズムを捉えていくと大人と子どもの関係性、大人と若者の関係性というのはそれぞれ変化する。変化せざるを得ないというか、そのあたりを捉えないと、全てが対等で平等というパートナーシップを一方で大事にしなければならないと同時に、ある意味大人の側の責任みたいなものがあやふやになるというか、子どもはある意味、依存性が大人との関係性の中では高い。常に子どもも大人も共通の基盤としてともに弱さを抱えてはいるけれども、ある程度サポートしていかないといけない部分というのは、残っているのではないか。そこは、この報告書というくくりではどう表現したらいいのだろうと、私は注意しないとならないところだと思います。何でも手放しというわけにもいかない。ここは、主語が大人になったり、パートナーであるというふうな形で書いてあるのは、ある意味揺れているように見えるのも、この前提が我々の中にも見え隠れしているかなと思われるのですが。

○宮島委員

難しいですね。その依存という言葉は、いろんな形があって大人が子どもを支配することによって子どもに依存するというやり方もあるじゃないですか。

○萩原部会長

狭義の意味での依存ではないのですが。

○宮島委員

経済的とか、未成熟という意味ならわかります。経験があまりないとか。経済的に自立がしていないという意味ではあるかなとは思いますが。

○萩原委員

言葉をどうするのか難しいのですが、未熟と成熟といった表現もあります。

○宮島委員

経験値が高いとか低いとかだとあるかなと思います。

○村田委員

今までの議論などから思ったのですが、先ほどから現状に合っていないシステムだったり、情報化社会になってきていろいろ変わってきている中で、必ずしもその図式が成り立つかという、僕は疑問を持つところがあって、SNSとかそういう部分に関しては、若者のほうがありえないくらい長けていたり、間違いなく僕らのほうが経験豊富で、そこに関して、知識、理解がない中で、それは何なんだってつついてくる大人がいたり、そ

ういうところは先ほどでたキーワードに「ともに」や「若い人に任せる」という一言があると、僕は心に響くかなと思います。実際に僕の地元の例なのですが、学生団体でスポーツレクリエーションというものをやっています、小学校に大学生何人かで行って、子どもたちの放課後の居場所をつくるというのを、横浜市の「はまっ子」という児童預かりシステムと一緒にやらせていただいたのですが、そこから見えてきたことは、「はまっ子」の職員は子どもと遊んでくれない。でも僕らスポーツレクリエーションの大学生が何人もいることによって小学生が楽しくなって、今まで町内会の集まりは子どもが全然集まらなかったのに、僕らが行くと子どもたちがわかった瞬間にじゃあそれおもしろそうだから行くわという、新しい何かが生まれたことによって、今まであった現行のシステムがより生きてくるということもなくはないのかなと思って、「ともに」というものと繋がってくるのかなと思いました。

○萩原部会長

若者独自の影響力あるいは力に着目することは、最初の論点に出てきているところです。若者の力というものを単に社会が要請する能力の束だと見ずに、若者独自の力というものに着目すべきだということが、後半になると今御指摘いただいたところが若干弱まってしまっている。若者独自に発揮する力がそもそもあるということです。

○村田委員

僕ら若者は、経験がないので、今までイベントをやるときに絶対に大人のほうが町内会や子ども会をやられている方々のほうが確実に強い部分だと思います。でも、その中でも僕らが準備段階で活かせる強みは若者としてもあるわけで、じゃあ組織の中に入って、君はこういう風に動いてくださいというよりも、ちょっと任せてもらって、若者とともにという感覚でなにかができると生きてくるのかなと思いました。

○墓田委員

ITは私達の年代は凄く弱いので、若者の力を借りて、不登校児にITのリテラシーをつけるということで、プログラミング教室をやったことがあります。そのときに若者10人くらいが、私達もプログラミングできるし、子どもの中にも、無口な若者でもペッパー君を通じて話すことによって、あのお兄ちゃんたち今度いつ来るのと、私達ではなくてお兄ちゃんたちいつ来るのと、不登校児の子たちからリクエストが出るようになって、ある程度若者に事業を任せてみると私達がつくりこむよりも、すごくいいことが結果として現れたので、任されるとそれなりにきちんとできる。ですから、若者に任せるということについて大人側ができていなかったのかなとそのときに反省しました。

○坂倉委員

もうちょっとダイナミックな現象だと捉え直せるといいと思います。町内会のイベントを若者に任せて、これまでなかったことをつくる。そういう言い方をしてしまうと、ある枠組みの中で限定したパートを担ってもらうように見えてしまいましたが、本当はそうではないと思います。

つくり出すということ自体がともに新しい社会を生じさせている行為だと思います。限定されたものではなく、それも社会の一部だと考える。SNSという言葉が出てくると、「ああそれは、年寄は」となるのですが、正確にはわかりませんがザッカーバーグにしても Twitter の創業者にしても多分 30 代までにつくっている。この報告書の中でいうと、若者がつくっている社会システムなわけです。場合によっては 20 代も創業者だということになるかもしれませんが、Twitter とか LINE そのものが既に誰かに与えられたものだと考えているからだめなのであって、そういうものをつくっていくことは、世代は関係ない。その一部が萌芽的に始まっているのが、町内会のこの部分を大学生がやってみようということだって、それが Instagram というシステムをつくり出すことの第一歩じゃないですか、そのように私達は社会をともにつくりあっていくわけだから、その行為を大切にしないで何ができるんですかという、そのように捉えたほうが、じゃあ 60 代になって新しいこと始めてはいけないのかということではないことも総じてわかることでしょうし、それがいろいろ回り続けるのはみんなそうですが、いろんな人が働きを通じて社会をつくり合っているんだと見えたほうがより腑に落ちるなと思いました。

○宮島委員

人は私の中では、相互依存じゃないかと思っています。大人でも弱いし、子どものほうが優れている部分が当たり前にあります。でこぼこがあるものが組み合わさるイメージなので、大人で依存度が高い人と子どもで自立度が高い人が組み合わさることもあるでしょうし。大人になれば大人というイメージが年齢でないなら成り立つかなと思いますが、相互にでこぼこがあって、補完しあって、逆にもっと相互が依存すればいいくらいに思っているのですが、それぞれのソーシャルキャピタルをシェアしあって、坂倉さんがおっしゃるように新しい社会を不完全な者同士が補完し合っつつくっていくんだというイメージかなと思います。得意な人は得意なことを出し合っ、持ち寄っつつくっていくイメージだという感じがあります。

○萩原部長

分かったうえで仲介になれる人について先ほど嶋村委員がおっしゃいましたけれども、仲介人になれる人というのは若者でもいいですが、この状況をわかって、あえて動く人がいないとまずいですね。極端に言うと、今回は若者中心ですが、例えば 4 歳、5 歳というところで、想定して考えると 4 歳、5 歳でも確かに大人にはない力があって、責任感を持

って何かをなそうという意欲があるわけです。だけどその一方で衣食住は大人や社会が保障していく必要がある。出て行けというわけにはいかない。そういう大前提となるようなことを抜きにしてしまうと、若者もある面、当然若者がつくる力はすごいし、大事で尊重しないとにならない、一緒に社会をつくるパートナーであると同時に、ある程度社会のほうで、大人の側で検討して若者が力を発揮しやすい環境をつくるという配慮みたいなものは、誰がするのかということになるのではないかと思います。

○田中委員

私は子どもから大人になっていく過程について、スポンジみたいなイメージを持ちました。最初はかなり吸収力があるスポンジで、ちょっと絞って修正してまた吸収してというような、段々大人になってくると吸収力が弱まっていく、残念ながら。まっすぐというよりは吸収力。スポンジ自体を大きくしていくとか、吸収力が弱まらないように柔軟でいられるというのがいろんな人の努力によると思いますが、そんなイメージを持ちました。

○坂倉副部長

私は、大人の方が偉くなっていく意味ではなく、そんなに違和感はないです。前提として、子どもを育てなければならないのは、誰かがやることではなく、社会の責任だと思います。自分が学ぶというのは、個人のベネフィットを最大化するものであるということと履き違えられすぎているところがあると思います。社会が子どもや若者、後進を育てないとならないという社会的な構造の中で、次の世代が担わなければならないのは、大きなところで言うと、社会が持続できるために必要なことなので、個人の意思は関係なく、そういった前提がないと続かない。教育は社会全員が義務を負っているものなので、みんなで育てないといけない。学びたいかどうか個人の意思は大事ですが、そればかりではないことが前提としてある。プラス、人間は死ぬまで成長するのであるという前提が確認されるといいなと思いました。

○嶋村委員

考古学の世界で文明が発達すればするほど、様々な多様性に対応できる脳が発達するけれど、それと同時に自立は遅れるという話がある。自立というものがテーマになっているのですが、今ITが進化してとか、なればなるほど当然今までは、この歳にいわゆる自立となっていたものが、20代後半、30代になっているのは多分宿命なのだろうと思います。だけど、さっき4歳、5歳の話がでていましたけれど、やっぱり小さいときは、いっぱい甘えさせてもらった経験があつて、何かやるごとにそうだねえって、面白いねえ、いいねえ、そうそれがやりたいんだねといっぱい言ってもらう。自分のやることに意味があるんだという経験があり、そういう意味では受容されるという経験があり、依存や未成熟とはまた違うのですが、それと一体になっているような感じがします。だからやっぱり、

身近な大切な人に見てもらったとか、認めてもらったという経験があり、人は次にいけるのかなというのは、依存、保護や育成の部分がすごく大事だなと思って、それが少ない人はやっぱり後ろにずれていく。うちの遊び場でも、やっぱり見てもらうために、いろんなことをやりだす子たちがいて、時にはでっかい机を放り投げるなどいろいろします。受容されたいという経験もずっと、ずっと続くんだろうと思って、それと自立というのが常に繋がっているような気がしますし、人によって違うのかなという気がします。

○萩原部会長

もちろん理念形ですので、その通りにいくものではありません。ただ、御指摘いただいたように大人と子どもの関係性によって変わっていくもので、若者という世代をとりあげると、この辺のところ非常に微妙になります。

○宮島委員

人として、個としてどう臨むかという話と、何か事があったときに責任を取れるかという話は少し分けて考えたほうが良いと思います。責任の話や何か事を起こしたときとなっているのかもしれませんが、個と個で、場であるときのありようというのは相互なのかなと思います。ただ、どちらかというとなりの側が責任をとる意思があることは、ちょっとだけ違うという感じなのだろうかと思っています。それが地域になると、法人で何か場を用意したときには、法人の大人の意思があると思うのですが、地域はもうちょっとあいまいで、法人体系がないときはどうなのかなと、実際に政策として事を起こしたときに考えなければならない視点はあるかもしれないと思うのですが、どちらかというとなりの視点がすごく強すぎるので、ここで少し相互性を強めにしておくのはありなのかなと、戦略としてはありなのかもしれないと思いました。

○萩原部会長

そろそろ時間が来ているのですが、第5章については、3章を中心にしながらも5章にむけて、今後の提言になることがだいぶ含まれていましたので、割愛させていただこうと思うのですが、5章について、何かここというのがありましたらお願いします。

○笹井会長

先ほど議論になりかけたのですが、テーマ型のコミュニティやテーマに基づいて仲間をつくって、活動していく、それがどういう意味や機能を持つのかについてです。まずテーマは、誰かが与えてくれるものなのか、自分達でつくっているのかということがあります。社会教育の講座には決まったテーマがあって、ある意味与えられたテーマがある。議論もそうですよね、ディスカッションはこのテーマで議論してくださいとなります。でも、対話というものはそうではなくて、対話の中からテーマ性があるような、興味、関心を共

有できる事柄がある。やはり、対話、ダイアログをもっと強調したほうがいいと思うし、多分その中からコーディネーションの機能の必要性や、あるいはコーディネート役を担う人ということがでてくるのではないかと思います。だから、つくるというときに大事なことは、対話、ダイアログを重ねるということと、それは一見関係ないような人と対話することでコーディネーションということが出てくる。それをやらないとせっかく、若い人たちに社会参加してもらおうとする時に潰れてしまうのではないかと思います。そういうことを配慮いただけるといいかなと思います。

○萩原部会長

そこは確かに参考資料2となっている第4章の報告書の内容を見ていくと、場をつくっていくと同時にコーディネートしていくことの大事さも指摘されていると思いますし、これを受けながら第5章の提言に示すということだと思います。協議会でも非常に場をホールドする人の大事さが集中的に議論されているのでそこを活かしていく内容にしてもよろしいかと思います。

○坂倉副部会長

ここがいいのか、わからないですけども、地域という文脈のなかでもうちょっと入れていきたい視点は、私を知る限り今の元気な地域、現状にあって変わっていくという地域の担い手の中心は30代です。逆に30代の人を中心でない地域のほうが問題で、30代というと、この報告書の中で若者に入る、いわば後期若者ですよね。この書き方でいうと、まだまだ地域の主体は大人である40代以上であって、30代以下の人達は客体、周辺的な参加なのだととれる。もうちょっと、地域社会の実際の問題に即していくと、後期若者が主体にならなければ未来はないのであるというぐらいの、未来がないかどうかはわからないけれども、30代が地域をつくっていく主体になっていかなければならないのではないかと。実際にそういう地域のほうが元気であるという視点があると、より実態に近い提言になってくるのかなと思います。

○萩原部会長

ありがとうございます。

○嶋村委員

今のここの議論と違ってしまふかもしれないですけど、この前自分の家から9人の遺体が発見された座間の27歳の若者が、例えばこの提言の中の第3章の21個の意見と第5章の提言の16個の意見からどのくらいが落ちているのか。何がこぼれ落ちたのかどうかかわからないけれど、ここでこうあった方がいいよというもののどの位のものが彼になかったのだろうかという話で、どうやったら、彼があれだけの人達を殺さないで済んだ

のかというところ、そこと繋がるといいなと僕は個人的には思っています。今、神奈川ではないですけども、福井県の池田中学校の自殺してしまった子でも、その子にここで書かれている視点のどのくらいをはらっていたのか。自分の命を絶つということをやめるにはどうすれば良かったのだろうかというところと、繋がってほしいという思いがある。どのように表現されるといいかというところでは、ちょっと今わからないのですが。

○萩原部会長

そのあたりはとても大事なところですし、前回の指針づくりとも連動してきているテーマでもあるので、当然そういうところに響いていかないと、有効打ではないと思います。次回の12月に間に合うかわかりませんが、皆さんに御意見をメール等で、事務局のほうにお知らせいただいてもよろしいですか。今最後に嶋村委員から指摘された視点でもう一度読み直してみるとどうであるか、他の今回でできた御意見も踏まえてもう一度、報告書素案を読み直してみると、こういう風にするといいのではとアイデアがでてくるかもしれませんので、期限は事務局で区切っていただいて、皆様から追加の御意見を寄せていただく形にしたいと思います。ありがとうございました。

続いて、議題2「平成29年度神奈川県青少年育成活動推進者表彰受賞者」についてです。事務局から資料の説明をお願いします。

(資料2 平成29年度神奈川県青少年育成活動推進者表彰関係資料 説明)

○萩原部会長

ただ今の説明について何か御質問、御意見ありますでしょうか。受賞候補者の内訳を見ると確実に平均年齢が高くなっていく、仕事をしながらこういう活動をするのが非常に難しくなっている。会社員より無職の立ち位置の方が増えてきている傾向があります。

今年度の候補者について、案のとおり表彰するという事にさせていただくことでよろしいでしょうか。ありがとうございました。では、本日の議題については以上ですが、委員の皆様から御意見、情報提供等ありますでしょうか。最後に事務局からお願いします。

○青少年課長

本日は御議論いただき、宿題をいただいたとっております。先ほど部会長からお申し出がありましたとおり、御意見等さらにいただけるよう、メールでのやりとりをさせていただきたいと思っております。本日はありがとうございました。次回は12月に部会の開催を予定しておりますが、こちらも別途御案内したいと存じます。ありがとうございました。

○萩原部会長

それでは第8回企画調整部会を閉会します。ありがとうございました。

<終>